

種 別	無形民俗文化財
名 称	おいわけぶし 追分節 (おいわけ ま ごうた しなのおいわけ 追分馬子唄・信濃追分)
<p>「追分節」は、江戸時代に軽井沢宿・沓掛宿・追分宿の三宿を往来した馬子たちの仕事唄として誕生し、軽井沢三宿の旅籠内で飯盛女らにより三味線や太鼓、踊りが付き、酒宴の席の座敷唄として唄われるようになった。その後、街道や海を渡って各地に伝わり、「越後追分」・「本荘追分」・「江差追分」・「松前追分」などが誕生。これらは軽井沢で唄われた追分節が発祥と言われている。</p> <p>ゆるやかに唄われる「馬子唄調追分節」（後の「追分馬子唄」）と、三味線や太鼓、踊りが付きにぎやかに唄われる「座敷唄調追分節」（後の「信濃追分」）の七七五調を基本とした歌詞には、峠道や軽井沢三宿の自然・信仰・労働・風土・習俗・道標・旅情などが込められている。歌詞の一部を変えて唄われたものも多く、唄い手たちのその時の心情により、即興的に唄われていたことがわかる。</p> <p>明治時代になり、宿駅制度の廃止や近代化等により口承で唄い継がれてきた「追分節」の唄い手は減少したが、昭和に入り追分宿脇本陣「油屋」主人の小川誠一郎氏（明治34年-平成元年）を中心に継承活動が行われ、昭和57年に追分節保存会が結成された。</p> <p>「追分馬子唄」は、油屋主人であった小川誠一郎氏が油屋で奉公していた飯盛女おのぶ（幕末-大正12年）から直伝された唄を伝承してしており、馬鈴・馬の蹄音に合わせて独唱する。</p> <p>「信濃追分」は、座敷唄調のもので、三味線伴奏や囃子が付き、より華やかに唄われる。現在、追分節保存会で唄われている「信濃追分」は、油屋で伝承されてきた唄を小川誠一郎夫人のよし氏（明治35年-昭和40年）が、現保存会の会長 久能カヨ子氏に伝授したものである。</p> <p>「追分節」（追分馬子唄・信濃追分）は、軽井沢が宿場町として繁栄した江戸時代から数百年にわたり、口承により伝えられてきた軽井沢の伝統民謡であり、歴史的な背景を伝える軽井沢を象徴する貴重な無形文化遺産である。</p>	
 	